

尊徳以前

源流100年さかのぼる

時は江戸時代の中頃。武蔵野新田開発に伴う井戸掘り普請に駆り出された百姓たちに木札が配られた。仁の札は鎌(くわ)

地域おこしで功績

取りをする男に。義の札はもっこを持つ女に。札の札はざるなどで物を運ぶ女子供に。智の札は子守りをする女子供に。信の札は子守りをされる小児に。

そして、声が響き渡る。「仁の札を持つ者には麦3升、義の札を持つ者には麦2升、礼の札を持つ者には麦1升5合、智の札を持つ者には麦1升、信の札を持つ者には麦5合を配る」「い

いか、力ある者は力を出せ。知恵があるものは知恵を出せ。心優しい者はみんなに優しくしてやれ」。湧き返る百姓たち――。

これは、小金井市にあるNP〇現代座が公演する合唱構成劇「武蔵野の歌が聞こえる」の一場面だ。その声の主は、武蔵野新田

世話役の川崎平右衛門である。

平右衛門は江戸時代の中期、享保の改革の一つとして着手された武蔵野新田開発を成功に導いた。その後、美濃三川の治水

工事、さらに石見銀山の再興に当たった。武蔵国多摩郡押立村(現府中市)出身の名主であったが、その現場での仕事ぶりに目をとめた幕府に取り立てられ、新田世話役、支配勘定格を経て代官にまで登用された。

全国をまたにかけて、国家プロジェクトともいえる重要工事を担った。行った先々には、その功績と人徳をたたえる謝恩塔や供養塔などが設けられている。

平右衛門は土木・治水の専門官僚という面を持ちながらも、インフラ開発にとどまらず地域

おこし、人心一体となつての地域振興に取り組み、大きな成果を生んできた。その仕法の中心は、人が持つ力を引き出し、それを組み合わせることによつて、地域の振興を図っていくものであり、まさに協同を基本とした。

市民発案で舞台化

その川崎平右衛門を知る人は少ない。筆者も2014年に合

筆者略歴

つたや・えいいち 農林中央金庫勤務を経て
農林中金総合研究所基礎研究部長、常務取締役、
特別理事。2013年11月から農的社会デザイン研究所代表。
1948年生まれ、宮城県出身。

唱構成劇「武蔵野の歌が聞こえる」の公演に関係してからだ。そもそも平右衛門をテーマに劇をつくる話は小金井市民の発案による。武蔵野新田開発の拠点となる陣屋の一つが、今の小金井市にあったことが背景にある。

小金井市民と現代座代表の木村快さんが一緒になり、4年にわたって勉強会を積み重ね、その上で木村代表が脚本を書き上げた。並行して市民で公演のための実行委員会を結成し、その

広報やチケット販売、受付案内などの運営全般を担ってきた。

木村代表は、あくまで肉声が届く劇場での公演にこだわりの持つ。現代座にある90人規模のホールで、1994年から96年にかけて25回の公演を行い、農協関係者も含めたたくさんの人たちが見た。このように平右衛門の協同の心に打たれた人たちが、全てを協同の力によって実現し成功させたのである。

今回を含めて6回にわたり川崎平右衛門を紹介していく。平右衛門は元禄7年(1694)の生まれで、活躍したのは1750年前後。日本の協同組合の祖、源流とされる二宮尊徳の約100年前である。源流はさらにさかのぼると見ることもできよう。



◆ 新企画「協同の系譜」は、協同組合の源流をくむ先人の生き方や業績をたどります。

(次回は13日付)



川崎平右衛門の肖像画
(府中市郷土の森博物館所蔵)

農的社会デザイン研究所代表 葛谷 栄一